日本野鳥の会

No. 60
2005年10月発行

新潟県支部報

マイスコープ

シギ、チドリの渡来地（新潟市車場）

山田　清

私の住む新潟市（旧新津市）車場は市街の北側に位置し、車で少し走ると水田が広がります。田植えシーズンになると、シギやチドリの姿を楽しむことができます。これまで、野鳥の写真はあまり撮りませんでしたが、最近デジカメを購入し、シギ・チの撮影にはまってしまいました。

夏羽のウズラシギ（2005年5月9日　新潟市車場で山田　清撮影）

夏羽のムナグロ（2005年5月9日　新潟市車場で山田　清撮影）昨年（2004年）は200羽、今年は最大250羽ほどの群れを観察する事ができました。

クマタカのフィールドから

阿賀町　渡部　通

阿賀町でクマタカの棲息が確認されたのは、およそ20年前のことである。それまでは、図鑑などから本州中部の標高1,500m以上の亜高山帯に棲息する種として認識せざるを得なかった。おのずから、標高の低い阿賀町内において、棲息するハズがない！という先入観念を抱きながらフィールドに出かけていった感が強い。その後、猛禽類の調査・研究に携わる人が増えてきたのを機会に、クマタカの生態も次第に解明されてきたようだ。

1984年に日本野鳥の会が行ったアンケート調査によると、日本全国で約1,000羽の分布が推定されるに至っている。新潟県内においても、県境沿いの山地などで数ペアの棲息が確認されている。最近では、環境省や国土交通省、経済産業省などの調査結果や、現地の生態調査などから、日本におけるクマタカの最少推定個体数は約1,800羽とみられる（2004年８月：環境省発表）。

しかし、近年はクマタカの繁殖率の低下が指摘されており、棲息数の激減が懸念されている。このため、環境省は、近い将来において絶滅の恐れが高い種として、絶滅危惧種ⅠB類にランク付けしており、今後の保護対策が急務になっている。ここでは、阿賀町におけるクマタカの生態について、その一端を紹介し、会員諸兄の話題提供になれば幸いである。

《棲息環境》

私の調査しているクマタカの棲息地は、標高150～1,000mの範囲にあり、渓流や渓谷、岩場などが至る所に見られ、地形は複雑

図-1　クマタカの生息地の一例。図の中央部が営巣林で、南向きの斜面は、ブナやミズナラなどを主体とした林で、尾根にはキタゴヨウが生育している。

である。また、一部では集落も点在しており、これらのエリアでは、人と密接な関わりを持つ環境も比較的多い。

コナラ、ミズナラ、イタヤカエデなどを主とした二次林の面積が多く、山腹の緩い傾斜地には、スギ植林地も随所に見られる。標高600m前後より上部になると、ブナ林に変わってくる。尾根や急斜面には、キタゴヨウと天然スギが生育している（図-1）。

《繁殖生態》

これまでに阿賀町で発見されたクマタカの営巣木は、スギ２例、アカマツ２例、コナラ１例の合計５例である。このうち、コナラの場合は、直径が45cmほどで、地上から約20mの高さに、太い幹が二股となっていた部分に巣が架けられていた。巣の直径は約120cm、厚さが約70cm以上あるもので、長年に渡って使用されていたことが推定できた。

産卵は、本州中部以西の報告によると、３月下旬頃であるが、積雪の多い地方ほど産卵時期が早まるといわれている。おのずから、新潟県内は、冬期の降雪量が顕著で、特に山沿い地方は降・積雪量がきわめて多くなる。当地域も新潟県の下越地方にあって、積雪量の多いのが特徴といえる。このため、これまでの事例などから、３月中旬に産卵するパターンが多かった。

抱卵日数は45～50日とみられ、５月上旬にヒナが孵化している。育雛は、８月中旬頃まで続き、その期間は95～100日に及び、イヌワシと同じように長かった。

【育雛観察ノート】

2003年６月29日（曇り一時小雨）の観察結果を以下に記す。

７：05分　幼鳥はカラス大までに成長していた。
巣上に立ったままの状態で、羽づくろいなどを行っていた。スコープで見ると、腹部全体が黄ばみがかった白色で、顔の両側の一部が薄い黒褐色になっていた。頭部と背中の羽彩は、親鳥と同じまでになっていた。虹彩は灰青色だった。

図-2　親鳥（♀）が運んできた餌を幼鳥が足に掴んで食べようとている。親鳥は数分後に飛び去った。

８：07分　ピィー、ピーィ、ピーョと３回続けて鳴く。近くから親鳥の鳴き声。

８：12分　♀親が巣に餌を運んでくる（餌はリス）。幼鳥は、片足で餌をつかみ、巣上を歩いたりしている。直ぐに餌を食べようとはしない。♀親が巣上で見ている（図-2）。

８：14分　幼鳥が餌を食べる。

８：15分　♀親が巣から飛び立つ。

８：18分　尻を上げて巣外に脱糞。

９：22分　餌を食べるのを止めて巣上に座る。

図-3　送電線の鉄塔に止まる若鳥。厳しい冬を乗り越え、営巣林近くの送電線鉄塔に止まって獲物を探す。

9：50分　羽づくろい。数回、羽ばたきの練習。
10：10分　脱糞。
10：30分　ピィー、ピーィ、ピーョと２回繰り返して鳴く。
10：40分　営巣木を挟んだ対岸の林からピィー、ピーョと親鳥の鳴き声。
10：41分　ピィー、ピーィ、ピーョと３回続けて鳴く。鳴き終えた後、巣上に座る。
11：06分　羽づくろい。羽ばたきの練習。
11：30分　下山。

幼鳥の巣立ちは、巣の横枝に乗り移った最初の日とされている。そして、巣に戻ったり、枝と枝を行き来したりして巣の近くで過ごすことが多くなるという。親鳥からの給餌は、巣内で行われることから、その都度幼鳥は巣に戻る場合が多い。やがて営巣木の周辺を飛ぶようになり、次第に飛翔力を付けていく。その後も、営巣林内で生活することが多く、当地域でも、その年の冬から翌年の春ごろまでは、営巣林の近くで過ごす幼鳥を観察することが多かった。

飛翔力が増してくると、営巣林の開けた場所に飛んでくるようになり、見通しのよい斜面の枯れ木に止まったり、送電線の鉄塔などに止まっているのを観察したりすることがあった。図-3は、前年の夏に巣立った幼鳥が無事に冬を乗り切り、春になって送電線鉄塔に止まっていたのを観察したものである。羽づくろいをしたり、周辺を見渡したりしていたが、約20分後に山腹の斜面目指して一直線に降下していった。おそらく、ヤマドリかノウサギを見つけて急降下していったのであろう。

余談であるが、クマタカ棲息地には、何故かカケスを目にすることが多い。そして、しばしばクマタカの鳴き声（ピィー、ピーィ、ピーョという声）を真似るのである。中には本物そっくりの声で真似るケースがあって、びっくり仰天！といった時もある。声の主が、カケスと分かった時はガッカリしてしまうが、ここで視点を変えて考えるのも面白い。つまり、カケスの真似声がクマタカ棲息の可否を決定づけてくれる重要なポイントになるからである。

これまでの経験などから、カケスの真似た声が聞こえたなら、まず、その場所には、クマタカが棲息しているという判断を下しても良さそうなケースが多かったからである。カケスの真似声を一足早くキャッチする。それが、クマタカ棲息地の特定につながるワンステップになるといえる。

《食性》

当調査地におけるクマタカの餌動物は、中型から小型の哺乳類と鳥類が大半である。

動物ではタヌキ、テン、ノウサギ、ムササビ、リスが挙げられ、育雛期にはノウサギとリス（いずれも幼獣）が巣内に運ばれることが多かった。ノウサギは開けた場所で、リスは森林内で狩りの対象となったことが考えられる。森の中を巧みに飛翔するクマタカの姿を垣間見ることができる。

鳥類では、ヤマドリ、カケス、キジバト、ヒヨドリなどが挙げられる。また、一度ではあったが、集落近くの林道でネコが狩られているのが観察された。さらに、幼鳥が巣立ったあとの11月下旬に巣内の調査をした際、タヌキの足骨（成獣）らしきものが見つかったことから、中型の哺乳類も狩りの対象になっていることがうかがえた。

これまでの調査で、餌動物を食べている現

図-4　クマタカに食べられたノウサギ。内蔵部分が食べ尽くされ、背骨と足の骨が残っていた。付近に白い体毛が散らばっている。

図-5　襲撃された直後のヤマドリの雄。コナラの根本に横たわっており、頭部が失われていた。体温が残っていて暖かかった。

場に４回遭遇している。このうち、３月下旬に営巣地に近い南側斜面で、ノウサギを食べているところに出合った。私の接近に気づいて、クマタカは飛び去ってしまったが、ノウサギは内臓がえぐり出され、周囲には白い体毛が散乱していた。すでに内臓部分は食べ尽くされ、背骨と足の部分がわずかに残っていた程度になっていた（図-4）。

また、11月下旬、調査地内の登山道を歩いていたところ、緩い斜面の雑木林でヤマドリの雄が襲撃された直後と思われるのを観察した。ヤマドリは頭部が切断され、おそらくこれから内臓部分を食する時に私の気配を感じ取り、許容範囲の寸前で飛び去ったものと思われた。ヤマドリは、体全体がまだ暖かく、まさに狩られた直後のものであることが、ひしひしと伝わってきた（図-5）。

このように、調査地にはカモシカ、サル、タヌキ、キツネ、テン、イタチ、ノウサギ、リス、ムササビ、ヤマドリ、カケス、キジバトなどが棲息しており、これらを目にする機会も多かった。

《行動圏》

これまでの定点調査などによって得られたデータから、クマタカの飛翔ルートなどを地図上にプロットしてみた。その結果、行動圏は7.5～12.5km²となった。これまでの事例をみると、本州中部以西に棲息する５ペアのうち、行動圏面積の最低は11.25km²、最大は14.8km²であった。また、行動圏の特定ができた４ペアの面積は、13.3km²、14.1km²、12.2km²、14.8km²であり、平均すると13.7km²であったという。

今回の、当地域で推定された行動圏の面積は、これらの事例と比べると、面積はやや小さいことが分かった。地形的には、600～1,000m級の尾根が連なる内側に、渓谷や河川が流れる大きな谷地形の地域とみることができた。

クマタカは、繁殖期以外は単独で行動する場合が多いといわれている。雄は営巣地周辺で、ほぼ年間を通して行動するのに対し、雌は遠出行動をするという。

しかし、秋期になると、雌雄ともに営巣地周辺に執着するようになり、ディスプレイ飛翔などをするのが頻繁に見られるようになる。

上昇気流が発生しやすい昼前になると、この風を利用するようにして旋回上昇する。滑翔や旋回は、探餌行動のほかにテリトリーの監視行動などであり、秋期以降になると、雄の行動がよく観察できるようになる（図-6）。

図-6　旋回するクマタカ成鳥（雄）。秋期以降、営巣地周辺では頻繁に雄の旋回と滑翔が見られるようになる。

ペリットを調べてみよう

ペリットから得られる鳥類の餌情報

新潟市　千葉　晃

ペリットととは

ペリットは、鳥類などが飲み込んだ餌生物の不消化部分を丸めて吐き出したものです。鳥は歯を持たないため、クチバシで餌をちぎったり、砕いたりして飲み込むものもいますが、丸呑みするものも少なくありません。そうした餌動物は胃の一部（腺胃または前胃）で酵素や胃壁の助けを借りてある程度消化され、さらに砂嚢（筋胃：俗にいう砂ギモ）へと送られます。鳥の種類によっては、胃内に留まり貯まった骨、毛、羽毛、殻など餌の硬い部分や消化されにくいものがまとまり不消化物塊（ペリット）として吐き出されます。ペリットはタカやフクロウのような猛禽類で良く知られていますが、いろいろな鳥が吐き出します。私はカモメ、ユリカモメ、シギ類（キアシシギ、ミユビシギ、トウネンなど）で何度かその瞬間を目撃し、ペリットを採集した経験があります。

ペリットから得られる情報

ペリットは食べた餌を反映しているため適切な調査をすればその鳥の食生活を把握することが可能で、ひいては生活や生態を解明する貴重な情報を提供してくれます。ペリットは餌の質と量をある程度（場合によってはかなり詳しく）知らせてくれますが、気をつけないといけないこともあります。それは、捕食者（鳥類）の種類（多分年齢も関係あり）によってペリットの残り方が異なったり、餌動物の方も不消化物としての残り易さや残り易い部分が異なることがあるという点です。このような限界は最初からはっきり認識して置く必要があります。北アメリカの農耕地（採食地兼ネグラ）に生息するコミミズクとハイイロチュウヒのペリットが調べられました。同じ場所で同じ餌（野ネズミ）を主食としていながら、ペリット１個に含まれるネズミの骨の残り方に違いがみられたのです。ハイイロチュウヒの方がコミミズクの方より含む骨が少ないことが報告され、その違いは捕食者の消化力や餌の食べ方の違いに因るものと推察されています。また、飼育下のフクロウに年齢の異なる同じ種類の餌（ネズミ）を与え、餌の頭骨が成獣のものより幼獣の方がペリットとして残りにくい（消化され易い）ことも示されています。さらにトラフズクの成鳥に食べたいだけ食べられるようにしてハタネズミを与えた場合、その１日当りの採餌個体数は平均 1.8 尾（範囲：１～３尾）であるとの報告もなされています。私たちは約１ヶ月間トラフズクの越冬ネグラに通い、個体数を数え、同時に日々得られるペリットを採集して内容物を分析した結果、野外のトラフズク１羽が捕食するハタネズミは計算上平均 2.1 尾であることをつきとめました。これは先の実験条件下のデータとほぼ一致し、矛盾のないことを確かめています（Chiba et al., 2005）。さらに、繁殖期のトラフズクのペリットを越冬期のものと較べ、ペリット中のネズミの個体数に量的な違いのあることに気付きました（繁殖期の方が１ペリット当りのネズミの個体数が多いという結果を得たのです）。しかし、その意味を説明するまでには至りませんでした。異なる場所（環境）、異なる時期、異なる生活段階で資料を集め、定性的・定量的に分析していく必要があると思いました。この分野はまだ調べることが沢山ありそうです。

ペリットを調べてみよう

つぎにペリットの調べ方をお話しします。専門家ではないので、私たちがトラフズクでの経験したこと基にお話しすることになります。

採集：ペリットの採集は、可能な限り連続

的（継続的）であることが望ましいと思います。採集する場合は、いつ、どこ（どのような環境）で、何個採集したか、またそこにいた鳥の種類と個体数、できれば天候などもしっかりノートに記録しておいたほうが良いと思います。いつどこでは、最も大切な情報です。

保管と前処理：採集してきたペリットは新鮮か日数が経ったものかを調べ、陰干しにして十分乾かした後、1個1個重量測定（余裕のある場合は長さや太さも記入）し、日時などのデータを記入してから保管します。保管には小さなポリ袋や空き瓶などを利用します。

内容物検査と標本作成：中身を調べるに当り、つぎのものを用意します（作業に入る前に写真を撮っておくのもよいでしょう）：皿（スーパーの発泡スチロール・トレイ）、広口の空き瓶や空き缶、古手ぬぐい（目の粗い濾紙として使用できるサラシ、ガーゼなどでよい）、ピンセット（または先を細く削った割り箸）、ロート（100円ショップで入手可能）、お湯、虫メガネ（10倍程度）、ザラ紙、ラベルなど。つぎ順で作業を行います。①ペリットを1個1個空き瓶に入れ、お湯（熱湯を避け、70°以下）を注ぎ1時間程度放置します。②ピンセットか箸でサンプルをかき混ぜ、表面に浮いて来る獣毛や細かな混じりものを選り分けて古新聞紙等の上に置き、底に沈む骨など餌動物の同定に重要な部分を探します。この作業を何回か繰り返します（この過程でロートと濾紙代わりの古手ぬぐいを活用します）。③頭骨、顎骨および歯など小哺乳類の種同定に不可欠の部分を洩れなく探し、きれいに水洗いしてからその他の重要物といっしょに皿に並べます。④水を切ってザラ紙に並べ直し、数日間乾燥した後、ラベルをつけた容器（ポリ袋か新聞紙を折った簡易袋）に保管します。⑤サンプルの各部位を肉眼および虫メガネで観察し、餌生物の種類を同定し、場合によっては年齢を査定します。⑤の作業に関しては、末尾に掲げた図鑑が役立ちます。また、データの整理は表1なども参考になるかと思います。

参考文献

阿部　永（監・著）他（1994）日本の哺乳類. 東海大学出版会

Chiba, A., Onojima, M., and Kinoshita, T. (2005) Prey of Long-eared owl Asio otus in the suburbs of Niigata City, central Japan, as revealed by pellet analysis. Orinothol. Sci. (in press)

表1．新潟市郊外の2地域（西川と味方）で収集されたトラフズクのペリットとペリット内の餌動物

採　集　地	西　　川	味　　方
採集期間	1993年3月10日-4月10日	1995年5月15日-6月8日
鳥の生活段階	越冬後期	繁殖期
調査ペリット		
総数	47	29
総乾燥重量(g)	279.1	247.3
1個の乾燥重量(g)	5.9±3.4(0.7-18.7)*	8.5±4.1(1.7-20.3)*
骨の割合(%)	22.4±9.5(6.1-54.8)*	調査せず
ペリット内餌動物	推定個体数（個体数/ペリット1個）	
モグラ目		
ジネズミ	9(0.19)	5(0.17)
コウモリ目		
アブラコウモリ		1(0.03)
ネズミ目		
ハタネズミ	67(1.43)78.9%**	137(4.72)91.9%**
アカネズミ	1(0.02)	1(0.03)
ハツカネズミ	8(0.17)	2(0.06)
ネズミ科（種不明）		3(0.10)
推定餌動物個体数	85	149
平均餌個体数／1ペリット	1.8	5.1

*平均±標準偏差(範囲);**推定餌動物内相対値

三番瀬、谷津干潟　シギ・チドリ　ウオッチングツアー

新潟市　木下　徹

2005年８月26日金曜日夜10時、新潟駅南口バス亭に集合して、今年も太平洋側へ向かう車中１泊１日の鳥見ツアーに参加した。昨年は中型観光バスだったが今年のバスはなんとマイクロバス、秋田県大曲市の花火ツアーでほとんどの運転手が駆り出されバスはあるが運転手がいないとのこと。狭いバスじゃ酒でも飲まなきゃ眠れないとさっそく出発直後にコンビニでバスを止めて買い出しからツアーが始まった。最近の鳥情報を聞き、台風11号が当日通過したばかりの千葉県だけに珍鳥の期待が高まり、スゲーのが出るんじゃないかと期待で盛り上がる。三好パーキングで長い休憩を取った後三番瀬に到着、バスから降りると潮の香りが鼻をくすぐる。まだ早朝４時のため公園内は何も見えないが、海岸線に出ると真っ暗な中からカップルの話し声とシギの声が聞こえる。目を懲らしても何も見えず、望遠鏡をのぞいても何も見えない。目がなれた頃ようやく見えだした海岸にはまず点々と落ちているゴミが目に入った。汚い海岸だ。昨年は海苔の網近くにいたミヤコドリは姿はなく、全体に鳥が少ない感じがする。こりゃ台風に持って行かれたかと少しがっかり。次第に満潮となる時間帯に到着を合わせてあるため汐線が次第に近づいてくる。重そうな嘴のダイシャクシギの姿が肉眼でも確認できるようになり、近くに来ることを期待しながらカメラを準備してじっと待つ。ところが６時頃になると犬を散歩に連れてきた人たちが現れ鎖を離された犬が海の中へ駆け出し大喜びしている。残念ながらシギ達は蹴散らされた。少し離れた突堤まで見に行った人たちからミヤコドリの観察を聞き、見に行くが残念ながら見られなかった。突堤の海岸近くにはスズガモ11羽の中に毛色の悪い１羽のハジロカイツブリがいた。健脚組はさらに遠くへ観察に行き、携帯電話に情報が入る。出発の時間が近いため行くのを諦めていると目の前にキリアイが出現。ラッキー！じっとしてても鳥は飛んでくると実感する。次の場所は谷津干潟である。今年もセイタカシギやキョウジョシギが目の前にいてくれた。潮が満ちてくると共にシギやチドリと鳥見の人たちが集まってくる。今日は小潮で観察にはもってこいだとか。目が多いと多くの種類が出てくる。キリアイやヒバリシギを望遠鏡で見せてもらう。新潟でも数年に一度くらいしか見られないが、こちらでも珍しい種類だそうな、感激！やっぱりシギ・チは太平洋側に限る。だんだん潮が満ちてくるが帰りの時間が迫ってきた。後ろ髪を引かれながらバスに乗り込む。祝杯を挙げるためまたコンビニで停車。飲んだら新潟までは頭をカクカクしながらぐっすり眠れた。

アオアシシギ

セイタカシギ

中部ブロック会議に参加して

6/25(土)～26(日) 事務局

第13回目を迎える日本野鳥の会中部ブロック会議が、福井県大野市六呂師高原の福井県自然保護センターで行われ、県支部からは石部と事務局の本間・桑原の３名が参加しました。

中部ブロック会議は一昨年度から日本海ブロック（新潟・長野・富山・石川・福井）と太平洋ブロック（山梨・岐阜・静岡・愛知・三重）の小ブロックに分かれ交互に開催されることになり、今回は日本海ブロックの福井県での開催という形になりました。

道のりの途中で

北陸自動車道の福井北ICから国道を走る途中で、全国でも有名な２つの町を通りました。一つは曹洞宗の総本山永平寺のある永平寺町。二つ目は「カツヤマリュウ」が発掘され、恐竜博物館のある恐竜の町勝山です。

会議について

会議の前に約50名の参加者（14支部から46人と本部から柳生博会長以下３名）と県の施設である自然保護センターを見学したり、大塚岐阜県・三宅静岡両支部長をはじめ顔なじみの面々と挨拶を交わして会議に入りました。

しかし、大切な審議事項である本部理事・評議員の選出については、議長県の福井県支部から提案が「事前に推薦された候補者の了解をとり内定しています」という内容であり、単に承認をとるだけで、残念ながらブロック会議で選出することは形式だけになっていました。

研修会について

研修会では上木泰男氏から福井県小田山にある環境省１級渡り鳥観測ステーションでの30年間の記録について発表がありました。

はじめにこの観測所設置には、この地方に長く根付いていたカスミ網による密猟が深く関わっているとのことでした。

古い記録も含まれていますが注目した点は、アオジ60%、シロハラ12%、カシラダカ10%と多くを占める放鳥記録の中で福島潟で放鳥されたカシラダカやアオジが含まれていることでした。

柳生会長の話から

会長は野鳥の会の会長就任にあたって中西悟堂さんが好きで、家族に会いに行きそこで自分の娘さんと同じ年ぐらいの方と話をしたそうです。そして人と人とのトラブル大変さや、会の活動のあり方に関わる会長のストレートな意見について話を聞きました。

例えば探鳥会の服装で、関西の野鳥の会に出席した際、60～70人の人が迷彩服を着ていた。これでは女性や子供は怖がって会員にならないのではないか？野鳥の会では探鳥会の服装は赤や黄色はふさわしくないとしているが、服の色にこだわらず「赤や黄色を着ていてもいいんじゃないだろうか」ということなど、これまでの野鳥の会の活動に疑問を感じたことについて話をされました。

また、最近コウノトリの活動（兵庫県豊岡町）や、里山で子供達が自由に遊べるフィールドについて熱っぽく語っておられ、私たちも会長の元気をいっぱいいただきました。

探鳥会

翌朝５：00の探鳥会ではクロツグミ、ツツドリなど18種が観察されました。

柳生会長、プレゼントの越乃寒梅を持って帰りました。

文責　桑原

2005年山本山探鳥会

長岡市　末崎　朗

さる9月18日に小千谷市山本山で例年と同様にタカの渡りを見る探鳥会が開催されました。ただ例年と異なっていたのは、山本山が昨年の中越地震の影響を強く受けていたことです。中越地震の震源地に近かった山本山では、3か所ある登り口のうち2か所で大きく道が崩れたため現在は工事中で、通行止めとなっていました。残り1か所の池ヶ原という集落からの道は入り口がわかりにくく、途中、車ではすれ違いも困難な状況でした。また、私たちが重宝して使っていた山頂の展望台も鉄筋コンクリートの脚がつけね部分で割れ、立ち入り禁止となっていました。美しかった周辺の眺めも、地震直後よりは目立たなくなったとはいえ、かなりの場所で山肌が大きく崩れているのがわかりました。

こんな状況での探鳥会だったため天気が良かったにもかかわらず、たいして人は集まらないのではないかと幹事は思っていたようです。しかし、28人と思いのほか、人は集まりました。やはり地震でこんな状況だからこそタカの渡りを見たいと言うのが集まった方々の本音だったのではないでしょうか。9月16・17日と天気は良く、両日ともかなりの数のタカが見られたとのことだったので、今日はあまり見られないのではないか？展望台に昇れなくて、渡りをよく見られないのではないか？など心配の種はつきなかったのですが、そんな心配をどこ吹く風と9時35分に最初のサシバが見られると、タカたちは次々とタカ柱を作りながら渡り始めました。幸いなことに間近を通るタカが多かったせいか、展望台に昇れなくても観察にはあまり支障はありませんでした。私自身は地震であまり被害はこうむらなかったのですが、多少なりとも生活に影響は受けたので、こうして気持ちよく鳥を見られる幸せをしみじみと感じていました。タカたちも生息地が地震で影響を受けた個体もいたことでしょうが、こんな何百年に一度のような現象があっても渡りは絶えること無く営々と続いていくものだとしみじみ感じたりもしました。

午前9時から11時までの間に見られたタカは、サシバ53、ハチクマ27、ツミ6で、その他観察された種類は、メジロ、コゲラ、ヤマガラ、トビ、イワツバメ、アマツバメ、アカゲラの7種類でした。数も種類も例年より多くはなかったのですが、間近にタカを見ることができ、満足した人が多かった探鳥会であったと思います。身近にタカの渡りが見られる山本山が改めて素晴らしい所であると感じました。来年には道も直ると思うので、また幸せな気分になれることを信じて山本山を後にしました。

展望台の下にはコンクリートが散乱

展望台の下での観察

東蒲原郡阿賀町（旧上川村）柴倉渓谷源流部探鳥会

新潟市　岡田成弘

平成17年６月４日・５日に県支部総会と探鳥会が東蒲原郡阿賀町（旧上川村）で35名出席のもと開催された。新装オープンとなった「あすなろ荘」を会場として、４日には総会と研修会が行なわれた。東蒲原をフィールドとして活躍されている阿賀町（旧津川町）渡部通氏は、クマタカの繁殖生態について、定点小型カメラを用いて行なった調査から、外敵の侵入によるヒナの捕食などこれまで知られていなかった育雛期の状況など興味深い報告をされた。新潟市（旧巻町）の佐藤吟一氏は、東蒲原地方等で、撮影したクマタカなどワシタカ類の生態について貴重な映像をビデオで紹介された。阿賀町（旧津川町）出身の石部久氏は、東蒲原の鳥類相と柴倉渓谷の野鳥と自然について発表された。いずれも研究発表会に相当する素晴らしい内容であり、東蒲原の鳥類について見識を深めることができた。

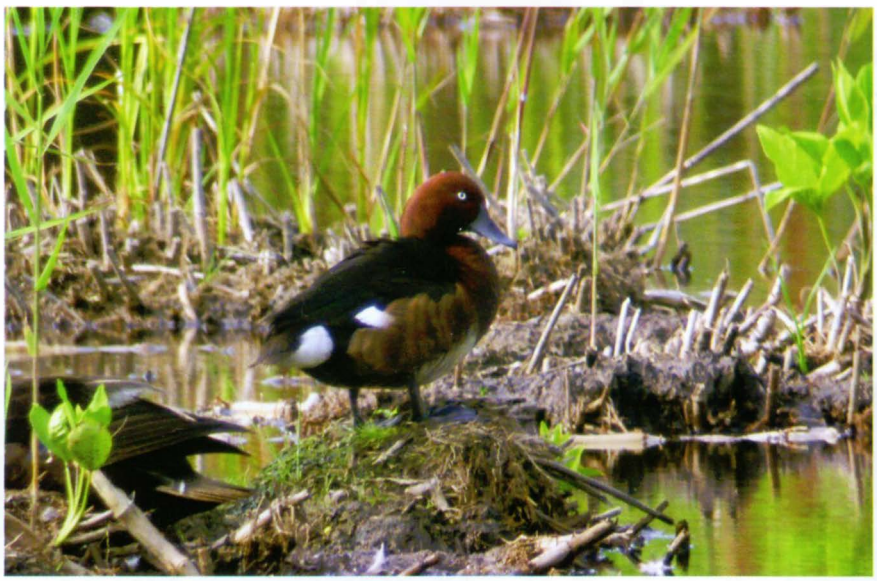
翌５日は４時に起床し、あいにくの霧雨混じりの曇り空であったが、バスに分乗して柴倉渓谷源流部に向かい、ブナの大木が残る林道を福島県境方面まで歩きながら探鳥を行なった。柴倉川源流部の沢筋の梢ではオオルリが高らかにさえずり、アカショウビンの声が谷あいに響き渡った。林道ではトラツグミが間近に鳴き、山あいから出現したハチクマの姿を全員で観察することができ、復路では山稜から飛び立つクマタカを確認できた。

出現種：アオサギ、ハチクマ、オオタカ、クマタカ、キジバト、アオバト、ジュウイチ、ツツドリ、ホトトギス、ヤマセミ、アカショウビン、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、ミソサザイ、トラツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ホオジロ、ノジコ、イカル、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス　計35種。

珍鳥飛来

今年も上越方面で珍鳥の発見が重なりました。メジロガモとアナドリです。いずれも、当地で熱心な野鳥観察を続けている大原淳一さんからの投稿です。これら２種は新潟県初記録と思われ、1997年本支部発行の「雪国の鳥を訪ねて」の本県産鳥類目録にも掲載されておりません。

アナドリ
発見日　2005年9月12日
発見者　上越市　大原淳一
場　所　直江津～小木航路
撮影者　大原淳一



メジロガモ（雄成鳥）
発見日　2005年6月19日
発見者　上越市　大原淳一
場　所　上越市大潟区（潟川）
撮影者　上越市　金子俊彦（６月２４日撮影）

発　行　2005年10月30日　No.60

発行人　大島　基　編集者　小林成光、末崎　朗、千葉　晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局　〒950-0941 新潟市女池３丁目13番25号

ＴＥＬ 025-285-2405　本間由紀子方　〈振替口座〉00610-1-6002